

赤十字の創始者

# アンリー・デュナン伝

赤十字はこうして生まれた

ピエール・ボワシエ 著

廣渡 太郎 訳

「赤十字」を創設し「ジュネーヴ条約」を推進。第1回ノーベル平和賞を受賞した人道と博愛の偉人、アンリー・デュナン。その波瀾に満ちた栄光と挫折の生涯をたどる赤十字人必読の書。



夢  
栄光  
孤高  
精神  
熱道

日本赤十字国際人道研究センター

ピエール・ボワシエ 著

廣渡太郎 訳

赤十字の創始者

# アンリー・デュナン伝

赤十字はこうして生まれた

日本赤十字国際人道研究センター

HENRY DUNANT

© International Committee of the Red Cross 1974

Author(s): Pierre Boissier

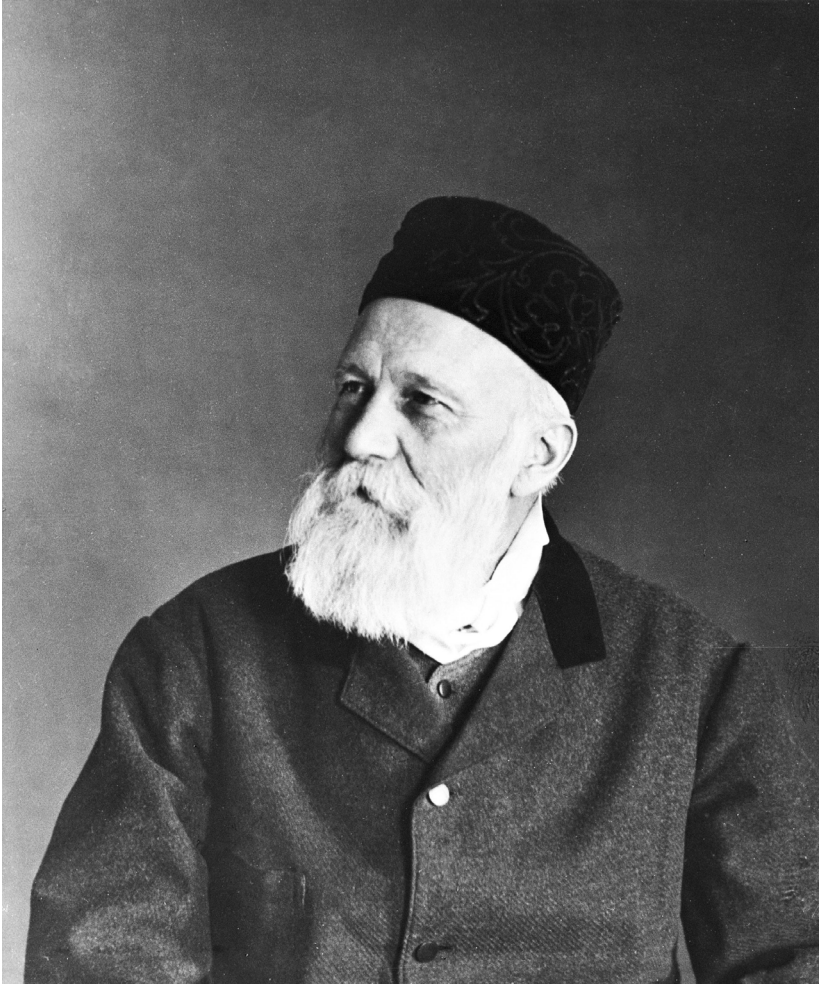
Copyright: ICRC

Release year: 1974

Edition: Henry Dunant Institute

Japanese edition published by Japanese Red Cross Institute for Humanitarian Studies (I.H.S) / Japanese Red Cross Academy. 2018

Japanese edition rights arranged with the International Committee of the Red Cross (ICRC) Mission in Tokyo



ジャン＝アンリー・デュナン J. Henry Dunant (1828–1910)

(スイス、ハイデン)

1896年6月、68歳のアンリー・デュナン。

© ICRC Archives

## 刊行に寄せて

本書は、赤十字の創始者であるアンリー・デュナンの伝記です。当センターでは、昨年、日本赤十字社創立140周年を記念して『日本赤十字社の父 佐野常民伝』を刊行し、それに続く企画として、本書の上梓を計画しました。

約30年前、本書は太田成美氏の訳で『赤十字の創始者 アンリー・デュナン』と題して刊行されたことがあります。すでに絶版になって久しいことから、今回、新たに赤十字国際委員会の許可をいただき、当センターの廣渡太郎研究員の新訳により原著にはない写真資料等も加えて刊行するものです。

現在、世界191の国と地域に広がる「赤十字・赤新月」の存在を知らない人はいないでしょう。しかし、赤十字の創始者であり、第1回ノーベル平和賞の受賞者であるアンリー・デュナンについて、その波瀾に満ちた明暗流転の生涯はあまり知られていません。そして、彼の人道に基づく先駆的な発想と不屈の精神、比類なき行動力によって、ジュネーブ条約に代表される「国際人道法」の礎が築かれた事実もまた、あまり知られていません。

グローバル化によって世界が複雑化し混迷を極める今日、私たちをとりまく状況は、アンリー・デュナンが生きた時代とは一変してしまいました。しかし、そうであるからこそ本書が、ひとりでも多くの方々、特にこれからの時代を担う若い皆さんにとつて、アンリー・デュナンの生涯とその功績について理解を深め、世界の平和と人道を考える新たな機会となることを願っています。

2018年12月

日本赤十字国際人道研究センター

# 目次

序 9

1. 孤高の旅人 13

2. 驚きのスクープ 16

3. ソルフエリーノへと続く道 21

4. トウツティ・フラテッリ——われらはみんな兄弟 26

5. 赤十字の誕生 30



6. 栄光の日々 53
7. カルヴァンの街との決別 56
8. 忘却の淵から 60
9. 見果てぬ夢の先へ——理想と現実の狭間で 64
10. 永遠のデュナン 71
- 訳者あとがき 76
- 参考文献 79



ソルフェリーノの塔 (イタリア、ソルフェリーノ)  
© Hirowatari / I.H.S.





若き日のアンリー・デュナン（スイス、ジュネーヴ）  
『ソルフェリーノの思い出』初版出版のころ。  
© ICRC Archives

## 序

あらゆる読者の心に響くようなアンリー・デュナンの短い伝記は、これまでのところなかった。しかし、とても幸運なことに、赤十字の創始者の名を冠した研究所の所長であるピエール・ボワシエは、自らの死の直前にその伝記に関する口述筆記を終えていた。彼の命を奪った痛ましい事故のままに前日、草稿に目を通した彼は、イヴォンヌ・ドウ・プラタレス女史に最終的に手を入れて完成するように依頼していたのである。その仕事を、女史はあらゆる点でみごとに成し遂げた。

本書を上梓することは、私たちにとって望外の喜びである。この伝記は読者の現実的なニーズに應えるだけでなく、赤十字に対して、また、自身が所長を務めた本研究所に対して、その人生のほとんどを捧げたピエール・ボワシエの最後の仕事でもある。

アンリー・デュナン研究所所長

ジャン・ピクテ



アンリー・デュナンの墓碑（スイス、チューリッヒ）

© Hata / I.H.S.

天賦の才を持つ者は、たいていは地上を見渡す高みへとたやすく舞い降りるものではなく、あまたの障害を乗り越えて道を切り拓いていく。同時代の大方の人々にとっては、彼はずっと無名のままであり、辛辣に批判され、たびたび否定されるのである。

フランツ・リスト

(1811—1886)



アンリー・デュナン像 (イタリア、ソルフェリーノ)

© Hirowatari/I.H.S.

## 1. 孤高の旅人

1887年7月、旅人が一人、手荷物ひとつ持たずに国境を越えてスイスに入った。それからしばらくとぼとぼと歩き、目の前に広がる美しい田園風景の遙か向こうにボーデン湖を臨む小さな町、ハイデン<sup>1)</sup>に着いた。中央の広場にいた子どもたちは、ちよつと遊ぶのをやめ、腰の曲がった陰気な旅人が通り過ぎるのを眺めた。この地に知り合いいもないその旅人は、重い足取りでペンション<sup>2)</sup>「ホテル・パラダイス」へたどり着き、わずか数ペンスでしばらくの間なんとか生きながらえることになるのであった。あまりに貧乏で、着替えすら一枚も持っていなかったのも、下着を洗濯する日にはベッドにもぐりこんで過ごさねばならなかった。長く伸びた白いあごひげから、かなりの高齢かと思われたのだが、それはずっと貧しく惨めな思いをしてきたからで、それから逃れようとこの奥深い田舎町に身を寄せたとき、実はまだ59歳だった。健康状態はとても悪く、長年耐え忍んできた困窮のせいで満身創痍だった。右手は湿疹でひどくただれており、その痛みで字を書くことさえままならなかった。

1) スイス東部、ドイツとオーストリアの国境近くに位置する町。当時は湯治のできる保養地として知られていた

2) 食事つきの下宿屋

体調がすぐれずベッドに伏していると、苦痛と怒りで胸がいつぱいになるのだった。ほどなく彼は地元ハイデンの公立病院に移り、日に3フランを病院に支払っていたが、その金は彼の窮状を知らされた親族が慌てて送つてよこしたものだ。病院のアルテア医師の心のこもった手当てのおかげで、やがて健康を取り戻し、再び字を書けるまでになった。彼は、忘れないうちに自分の考えを書き留めておこうと、子どもが使うような大判の習字練習帳に自伝をつづりはじめた。その筆跡は最初こそしつかりしていたが、老いるにつれ、手が震えているのがはつきりとわかった。彼の人生は、退屈なものであつたなどとはいえない——その生涯には喜びのときがあり、数多くの悲劇もあつたが、けつして無味乾燥なものでも、単調なものでもなかつた。

書いたものの中で、彼はそれまで自分を苦しめてきた敵や、恐らくそのときもなお彼を追いかけ迫害しようとしていた敵について、何度も触れている。彼は過度に敬虔なふりをする輩や偽善者をことごとく憎んだ。自分が死ぬときは、もはや何の意味もない空虚な形ばかりの葬儀ではなく、「貧民のように埋葬される」ことを望んでいた。ハイデンの病院で入っていた部屋は12号室だった。



ハイデン公立病院（スイス、ハイデン）

デュナンは晩年の18年半をここで過ごした。現在はアンリー・デュナン博物館となっている。ちなみに、1998年から2012年までICRC総裁を務めたヤコブ・ケレンベルガーは、1944年にこの病院で生まれた。

© ICRC Archives



ハイデン公立病院12号室（スイス、ハイデン）

デュナンは1892年4月30日にこの病院に入り、1910年10月30日にこの部屋で亡くなった。写真右の窓際には愛用の椅子が見える。

© ICRC Archives



## 2. 驚きのスクープ

もし幸運の女神が扉をたたいたなら、迷わず招き入れなくてはならない。ゲオルグ・バウムベルガーはそのチャンス逃さなかった。この若い記者が、赤十字の創始者であるアンリー・デュナンがまだ生きていたのを見つけたのは、思いがけないめぐり合わせだった。それはまさに予想外の一大ニュースだった！ 誰もがデュナンは死んだものと思っていた。もう何年もの間、その名前を耳にすることさえなかったのである。ところがいま、その人物がスイス東部の片田舎で、まるで世捨て人のように独りで暮らしているというではないか。すぐさまハイデンへと出向いたバウムベルガーは、病院の12号室に案内された。

年輩いたアンリー・デュナンは、最初、この好奇心旺盛な新聞記者に話しをする気などまったくなかった。だが、あふれ出る過去の記憶を抑えられず、不意に堰を切ったように話しはじめていた。声はややしわがれ、両目は眼瞼下垂がんけんのせいで少し隠れていたが、これまで聞いたこともないような、もつとも数奇はらんで、もつとも波瀾に満ちた

生涯の物語を突然語りだしたこの人物の胸の内には、依然として並はずれた情熱と活力が宿っていた。

バウムベルガーの記事はヨーロッパに一大センセーションを巻き起こした。記事は各地の新聞に転載され、2、3日のうちにヨーロッパ中の人々が知るところとなったのだった。

1895年、バウムベルガーがデュナンを見つけ出したとき、赤十字の存在はすでに世界中に知れわたっていた。ヨーロッパに続き、赤十字はアメリカ、アフリカ、アジアへと広がっていたのである。37カ国——そこには大国も数カ国含まれる——の各国に赤十字社が創設され、独自の病院や学校や病院列車を持っている赤十字社もかなりあった。それまでに赤十字は38の武力紛争に介入し、当初はほぼ実行不可能と思われた「戦いのなかにも慈悲を (Inter Arma Caritas)」というモットーを実現していたのである。赤十字がなければ戦場で屍しかばねとなっていたに違いない何十万人もの負傷兵の命が救われていた。

そのときまでに、42カ国が、負傷兵に関するジュネーヴ条約に調印しており、法曹

界はこれを国際法のもつとも堅固な砦のひとつだと認識するまでになつていた。

めざましく発展するこの新しい赤十字運動と、薄暗い病室の奥から突如現れたこの貧しい老人との間に、これほどの差があるとは！ 赤十字のすべての原点に、この人物が関わつていたなどということが、本当にありうるのだろうか？

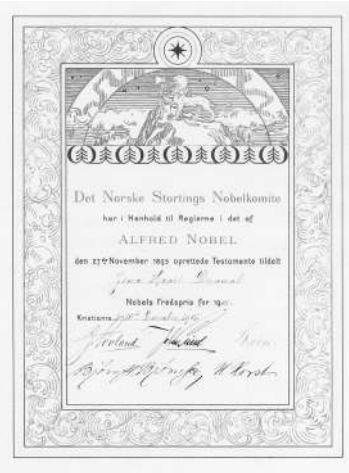
数カ月後の1896年5月8日、デュナンの68歳の誕生日は、彼にとつて大成功を実感する一日となつた。全世界から続々と称賛のメッセージが届いた。ローマ教皇レオ13世も、自筆の手紙をデュナンにしたためた数多くの著名人の一人だつた。デュナンに対する感謝の気持ちも、世界中から贈り物として届けられた。ドイツでは、デュナンのために公的な募金活動が始められた。ロシアの医師1千名が集う会議からは、苦痛にあえぐ人類への貢献を讃えて「モスクワ大章」が贈られた。スイスやその他の数カ国からは、支援の申し出があつた。数多くの赤十字社や福祉団体は、デュナンをそのメンバーや名誉社長にすると申し出た。

日を追うごとに、デュナンは再び有名人となつていった。しかし、名声にはまつたく目もくれず、著名な客との面会も一切断り、無遠慮な来訪者を避けて部屋に閉じこ

もったまま、デュナンは国際仲裁や軍縮や平和のための戦いに、かつてと同様に情熱を傾けていたのである。

デュナンの熱い訴えに、ヨーロッパ中が再び湧き立ち、1901年にはノルウェー国会が、デュナンとその旧い同志ふるで平和主義者のフレデリック・パシーに第1回ノーベル平和賞を授与した。

しかし、デュナンは名誉の真の価値が何であるかをよく心得ていて、自分はその賞金の一部すら受け取らず、スイスとノルウェーの慈善団体にすべて譲る手続きをとった。デュナンは問題が山積する20世紀の世界情勢について警告的な評論を執筆したり、地元の子どもたちやごくわずかな友人たちに会ったりしていたが、1910年10月30日、永遠の眠りについた。同年には、彼が尊敬してやまなかった二人の偉大な人物、フローレンス・ナイチンゲールとレオ・トルストイも亡くなっている。



1901年、デュナンが受賞した第1回ノーベル平和賞の賞状

賞状には「ノルウェー国会のノーベル委員会は、アルフレッド・ノーベルが1895年11月27日に制定した遺言規程に基づき、1901年のノーベル平和賞をジャン＝アンリー・デュナンに贈呈する。クリスチャニア、1901年12月10日」と記されている。

© ICRC Archives



デュナン発見を報じた「ユーバー・ラント・ウント・メーアー」紙

バウムベルガーの記事は、1895年9月6日、ヴェルテンブルク王国（首都・シュトゥットガルト）の有力な週刊新聞「ユーバー・ラント・ウント・メーアー」でも1面に掲載された。

© Deutsches Rotes Kreuz

### 3. ソルフエリーノへと続く道

アンリー・デュナンは、1828年5月8日にスイスのジュネーヴで生まれた。生まれ育った街ジュネーヴの影響と、中産階級の裕福な家庭の出身という背景から、彼は教養と洗練された気品と世界に関する博識を身につけ、さらに、厳格なプロテスタントの教育を受けた。

高名な物理学者ダニエル・コラドンを兄に持つ彼の母親アンヌ＝アントワネットは、デュナン自身がその「回顧録」の中で認めているように、彼に多大な影響を与えた。



#### デュナンの出生届

アンリー・デュナンは1828年5月8日にデュナン家の長男として生まれ、父ジャン＝ジャック・デュナンがこの出生届けをジュネーヴ市役所に提出した。書類左上に記されたアンリーの綴りがHenriとなっているが、後年、デュナン本人の意思でiをyに変更しHenryとなった。

© ICRC Archives

「このように広範で世界規模の人道活動は、その場の成りゆきで偶然に生まれるものではない。役立つ道具は、それを使う仕事のために前もって準備しておかなければならないのだ。」

母はデュナンの内面に「不幸な人々、身分の低い人々、抑圧された人々、社会から見捨てられた人々への深い同情心」を芽生えさせたのだった。

「18歳のときから、私（デュナン）は自分の余暇を、貧しい人々、身体の不自由な人々、死の淵にいる人々を訪ねて、その支援と慰安のために費やしていた。20歳のときには、日曜日の午後にジュネーヴの刑務所に服役している囚人たちを前に、旅行や歴史や初等科学の本を読み聞かせていた。つまり、戦争での負傷者たちと関わるずっと以前から、平時に、社会で不幸に打ちのめされた犠牲者たちへの世話を、私は始めていたのである。」

デュナンの父ジャン＝ジャックは、ジュネーヴ行政区裁判所の判事を務めた経験のある実業家であり、デュナンは幼少期から善い行いをするよう、その父から教えこまれた。通っていたカルヴァン学校を中退したデュナンは、家庭教師のもとで学生時代を終えると、しばらく銀行に勤めて実務を学んだ。すでに1849年には、「アウエイクニング（大覚醒）」として知られる信仰復興運動の影響を受け、また、キリスト教への燃えるような信仰心に突き動かされて「自由教会」の青年会に加わり、イギリス、フランス、ドイツ、オランダやアメリカの同様の団体と手紙を交わした。また、国際的で、教派を超えた全キリスト教的な結束をめざす運動に可能性を見出したデュナンは、1855年、万国博覧会のためにパリに集った仲間たちと共にYMCAとして知られる「キリスト教青年会」を設立した。

その一方で、銀行での仕事を通じたあるきつかけからチャンスを得たデュナンは、その20年前にルイ＝フィリップ1世<sup>3)</sup>の軍隊が征服したフランスの植民地アルジェリアでの自らの成功を夢見て、ジュネーヴを後にした。すぐに彼は、起業家魂をくすぐるその土地柄に魅了され、持ち前の鋭い洞察力を働かせながらあちこちを見て回った。

3) オルレアン朝のフランス国王で、1834年にアルジェリアを併合した



遠くチュニジアへも足をのばして『チュニジアの国政に関する報告』という控えめなタイトルをつけたその国に関する本を書いたが、彼の自由闊達かつたな人となりは、すでにそこにもはつきりと現れている。彼はイスラム教の研究にも没頭し、当時の多くのキリスト教徒とは異なり、邪教だと考える者もいたその宗教に深い畏敬の念を持って接し、感銘を受けた多くの点について率直に書き記した。アラビア語のレッスンまで受け、難しいアラビア文字の書き方も練習した。それだけにとどまらず、彼は北アフリカの人々をこよなく愛するようになり、アルジェリアのジェミラ近郊で大規模な農地の開拓事業に着手したときには、少なくとも自分の所有地ではアルジェリア人労働者が幸福で十分な給与を得られるようにしたいと、自らに誓ったのだった。

しかし、デュナンは当局の反発をまったく計算に入れていなかった。「有限会社モン・ス・ジェミラ製粉」の名で1858年に設立した法人には、成功に必要なものはすべて揃っていた。所在地は熟考の上で選んだ場所であつたし、資金は潤沢にあり、製粉設備も最新のものを整えた。唯一残っていた問題は、小麦を栽培するのに必要な土地の確保だった。ところが、驚いたことにフランスの植民地担当省庁は、デュナンにまっ

たく耳を貸さなかったのである。何とかしようにもうまくいかず、いろいろな部署をたらい回しにされ、どこでも無愛想に断られたのだった。もつと高い地位にいる役人に会わなければだめだと必死になったデュナンは、パリに赴き、さまざまな省庁の大居室の外で待つことにほとんどすべての時間を費やした。しかしそこでもまた、あいまいな返事ではぐらかされたのである。

この問題を解決できるさらに上位の人物といえば、もうフランス皇帝のもとを訪ねる以外になかった。ところが、ときの皇帝ナポレオン三世は、そのときすでにパリから遠く離れたイタリアのロンバルディアにいた。イタリアの独立と統一という大義のもと、ナポレオン三世はフランス軍総司令官として、若き皇帝フランツ・ヨーゼフ一世が率いるオーストリア軍と戦っていたのである。

デュナンは、自分自身もその戦地ロンバルディアへ行こうと決心をしたのだった。



ナポレオン三世 (1808-1873)  
「ソルフェリーノの戦い」の翌年、  
1860年3月ごろ。

© via Wikimedia Commons

#### 4. トウツティ・フラテツリ——われらはみんな兄弟

デュナンがイタリアのロンバルディアに着いたとき、あたり一帯は戦争で荒廃しきつていた。モンテベッロ、パレストロ、マジエンタでいくつもの戦闘があつたが、戦争の勝敗を決する大会戦が差し迫っていることを誰もが感じていた。

ワートルローの戦い<sup>4)</sup>以降、もつとも多くの血が流された大殺戮<sup>だいさうりく</sup>として知られることになる。その決戦<sup>5)</sup>は、ソルフェリーノ近郊で1859年6月24日に起こった。決戦の日、デュナンも戦場からそう遠くない場所におり、疾走する馬車の中からはつきりと砲声を聞いたに違いない。その後ほどなくして、彼は人生最大の衝撃を受けることになるのである。



「ソルフェリーノの戦い」

カルロ・ボッソリー 〈1815—1884〉作、1859年  
リトグラフ

Battle of Solferino by Carlo Bossoli

© via Wikimedia Commons

4)1815年6月18日、ベルギーのワートルローで起こった、フランスのナポレオンⅠ世と、イギリス、オランダをはじめとする連合軍およびプロイセン軍との会戦

5) 後年、「ソルフェリーノの戦い」と呼ばれる

日暮れどき、デュナンはカステリオーネ（デッレ・ステヴィエーレ）という町に入った。<sup>6)</sup> この町は、近くの戦場から帰還した多くの負傷兵であふれ、大混乱に陥っていた。9千人の兵士が街路や広場や教会を埋め尽くしていた。デュナンは、何の覚悟もないまま、いきなり戦争の恐ろしさを目の当たりにしたのである。

凄惨な光景に圧倒されたデュナンは、馬車から飛び降りると、町なかを抜け、町の主教会であるキエザ・マジョーレ<sup>7)</sup>へと続く道を登っていった。その坂の上から下まで、雨水を集めるための側溝には幾日にもわたって血が流れ続けたのだった。

デュナンは教会に足を踏み入れた。そこは負傷兵であふれており、動けずに横たわっている者やうめき声をあげる者、激痛に泣き叫ぶ者もいた。聖堂内にはハエが群がり、排せつ物と



キエザ・マジョーレ教会 [カステリオーネ大聖堂]  
(イタリア、カステリオーネ・デッレ・ステヴィエーレ)  
© Hirowatari / I.H.S.

6) 実際にデュナンが到着したのは、戦いの翌日、6月25日の夕方だったとされる

7)「キエザ・マジョーレ」とは「大教会」を意味する俗称で、正式には「カステリオーネ大聖堂」という

壊疽えそが発するひどい悪臭に満ちていた。

デュナンには医学の知識などまったくなかったが、とにかく傷口を洗い、服装を整えてやり、石の床の上にぞんざいに投げ出されていた負傷兵のために寢床を作ろうと奮闘した。誰もが喉の渇きを訴えており、泉から水を汲んでは飲ませた。死にゆく者の最期の願いに耳を傾け、自分の腕でその兵士の頭を抱えて短い慰めの言葉をかけた。大勢の地元的女性たちに、救護に手を貸すよう説得もした。ところが彼女たちは、最初は躊躇ちゆうちよし、フランス軍兵士の看護を嫌がった。オーストリア軍が大挙して戻ってきて、敵軍を援助したとして自分たちを罰するのではないかと恐れたからである。しかし、デュナンは、苦痛は万人にとって等しく同じであり、いま肝心なのはその救護だと女性たちに言い聞かせたのだった。ほどなく、女性たちもデュナンの発した言葉「トゥツティ・フラテッリ (Tutti Fratelli) ——われらはみんな兄弟」を口々に繰り返すようになっていた。

同情に加えて、デュナンは自分の中に別の感情がこみあげてくるのを感じた。それは、やり場のない憤りであった。彼が昼夜を問わず手当てをした負傷兵たちが「ああ、

聞いてください！ 我々は立派に戦い、でもいま、見殺しにされているのです」と口々にいうのを聞いたからだ。

置き去りにされ、見捨てられるという兵士のその思いに、デュナンは衝撃を受けた。一度に2、3名ずつの負傷兵を戦場から連れ帰るための騾馬ろばが出されることも、ここではごくまれだった。戦場に置き去りにされた兵士たちは、日が落ちれば盗賊のなすがままにされ、身ぐるみはがされ、疲労と喉の渇きで死んでいく以外になかった。幸運にも、情け深い戦友に救われた負傷兵や、手当てをもらえそうな場所まで自力でたどり着くことができた兵士にしても、大差はなかった。デュナンには、その場の状況から何が問題なのかはわかった。カステイリオーネには、9千人の負傷兵に対してフランス軍の軍医がわずか6名しかいなかったのだ。驚いたのは、これが単なる不幸な偶然などではなく、これまでも常にそうであった点だった。つまり、兵士の数と衛生部隊の人数の途方もないこの不均衡のせいで、衛生兵は決定的に少なく、実質的にはいないのに等しかったのである。戦闘ができない兵士は、もはや誰にとっても何ら価値がない存在だった。

## 5. 赤十字の誕生

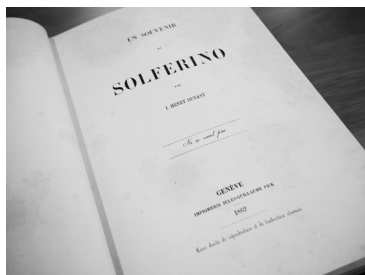
アンリー・デュナンの出張は、望んでいたナポレオン三世への謁見が実現せず、失敗に終わった。パリに戻った彼は、かつてあらゆる省庁で経験したのと同じ、ものぐさなお役所仕事に対する闘いを再び開始した。控室から次の控室へとたらい回しにされ、そうこうしながら2年が過ぎた。その間に、カステイリオーネの記憶は、時の流れの中で薄れてしまったのだろうか。もちろん、そんなはずはなかった。デュナンは自分が目撃した恐ろしい光景が忘れられずにいた。あの光景のせいで、心の奥深くで、自分にはまだしなければならぬことがあるのだという、漠然とした衝動に駆られるのだった。

そして、ある日突然に、もうそれ以上耐えられなくなった。ジュネーヴへ戻ると自室に独り閉じこもり、インスピレーションに導かれるまま一冊の本を書き上げ、『ソルフェリーノの思い出』というタイトルをつけた。

彼は自分が経験したあの恐ろしい衝撃を、読者と分かち合いたいと願った。ふつう

は入念に隠蔽され、表にでることのない戦争の側面を垣間見たことで知った、あの恐ろしい衝撃である。デュナンは自分と共に読者を戦地へ、壊疽<sup>えそ</sup>と血の悪臭が漂うあの戦場へ連れていこうと意図したのである。この本は大変な成功をおさめた。文芸の大作、自然主義文学の最高傑作のひとつとまでいわれて称賛を浴びた。しばしば痛烈な批評を書くことで知られたゴンクール兄弟も、次のように書いている。

「この本のページを繰りながら私は感動でうち震えた。人間の感情の琴線に触れ



### 『ソルフェリーノの思い出』

初版本（1862）

初版本は1862年11月に1600部が印刷され、うち400部が非売品の献呈本として革装丁で製作された。さらに12月には残っていた初版本をペーパーバックに変更して1000部が、翌1863年に第3版として3000部が製作された。

© 日本赤十字社 / 赤十字情報プラザ



る作品であり、崇高の域に達している。ホーマーよりも、『万人の退却』<sup>8)</sup>よりも、他のどれより抜きんでて優れており、何千倍も素晴らしい……。読者は、あらゆる戦争を呪いながらこの本を読み終えるだろう。」

デュナンは、他の誰よりも戦争に対して嫌悪感を抱いていたに違いない。この本を読んで彼の気持ちに共感しない者はいない。しかし、それはデュナンの望んだ目的ではなかった。彼がめざしていたのは、戦争の持つすべての憎むべき側面、すなわち、兵士を動員し、数えきれないほどの苦難と危険な目にさらし、その後、敵の砲弾のせいで兵士が戦えなくなり、保護を必要とする状態になれば、家畜のように見殺しにする現実を強調する点にあった。

そこでデュナンは世論にこう訴えた……

「したがって、あらゆる国、あらゆる階級の人々、現世に権力を有する人にも、

8) クセノポン著『アナバシス』

つつましやかな工員にも訴え、懇願しなければならない。……この訴えは、男性と同様に女性にも、……将軍やその他の下士官にも、博愛主義者にも、そして作家にも向けられなければならない……」

さらに進んで、デユナンは建設的な提案をしている……

「……各国の軍事戦略の第一人者たちが一堂に会するような特別の機会に、この会議とも呼ぶべき好機に乗じて、何らかの国際的に神聖な協約として、一つの原則を定めることは望めないであろうか。その原則が一度承認を受けて批准されれば、ヨーロッパ各国における「負傷兵救護団体」を設立する根拠となるのではないだろうか？……」

人道と文明は、ここで提案したような組織体を、いやおうなしに要求するものである……その援助に手を貸すのを拒むような王族や君主がいるであろうか……大切な国民の生命を守るために、懸命に尽力する人々への保護をためらう国家が

あるだろうか……そんな士官が、将軍が……そんな主計官が、軍医がいるだろうか……？

熱心で、献身的で、こういう仕事をする資格の十分にあるボランティアたちの手で、戦争のときに負傷兵を看護することを目的とする救護団体を、平和で穏やかな時代に組織しておく方法はないものだろうか？」

すべての問題は、この質問に含まれているといえよう。

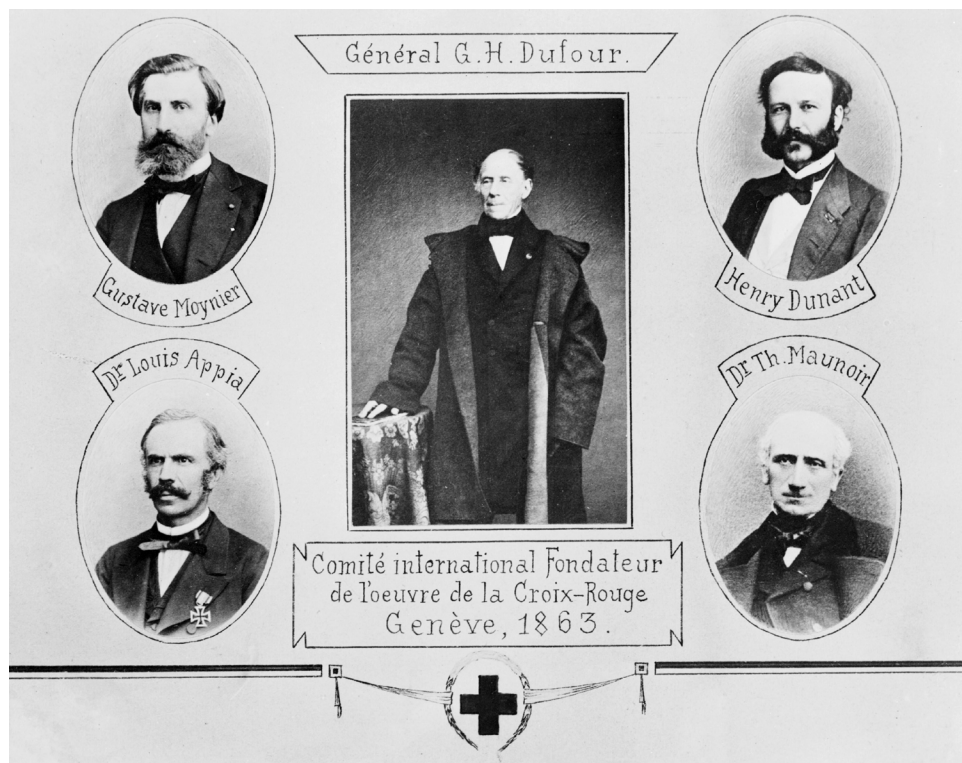
ヨーロッパ全土から寄せられた数えきれないほどの手紙は、デユナンの訴えが、あのロマン主義的思潮が全盛だった19世紀半ばの人々の心の琴線に触れ、大きな感動を呼び覚ましたことを示していた。そんな折、ジュネーヴの読者の中に、共感したと手紙に書くだけではとてもすまないほど感動に震えていた一人の男がいた。

その人物、ギュスターフ・モアニエは、デユナンよりほんの2歳年上で、『ソルフェリーノの思い出』が出版された1862年には36歳であった。法律家を生業なりわいとし、人々の社会的向上のために献身する非常に勤勉な人物だった。社会問題の研究に没頭して

おり、その多くの活動のひとつには、世間の誰もが一目置く「ジュネーヴ公益福祉協会」の会長職の仕事があった。

『ソルフェリーノの思い出』を読んで、その結論に賛同したモアニエは、そのまま椅子にふんぞり返って何もしないような人ではなかったため、すぐにデュナンのもとを訪ねた。この二人は、ある部分では互いに補い合うような性格の持ち主でもあったが、一方で、想像を絶するほど対照的に異なっていた。したがって、二人がお互いを深く理解し合えなかったことは驚くにあたらない。だが、彼らが合意できたものもあった。それは、ジュネーヴにデュナンの考えを実行に移すための小委員会を設立することだった。

1863年2月にその委員会は設立され、わずか5人だけで構成された委員会だったため、通称「5人委員会」と呼ばれた。これが5人だけで構成されたことは、とても賢明な判断であった。



「5人委員会」の創設メンバー

(左上) ギュスターフ・モアニエ

(右上) アンリー・デュナン

(中央) ギョーム・アンリー・デュフル將軍

(左下) ルイ・アピア医学博士

(右下) テオドル・モーノワール医学博士

(上記5人のカタカナ名表記については、赤十字国際委員会駐日事務所の定訳に準拠している。)

ギヨーム・アンリー・デュフル將軍——初代委員長。委員会の最長老でスイス連邦軍の創始者としても知られた。

ギユスターフ・モアニエ——デュフル將軍の後に委員長に就任し、以後、半世紀にわたって堅実に委員長を務めた。

アンリー・デュナン——5人の中の最年少者で、委員会書記を務めた。

ルイ・アピア医学博士——戦傷外科の権威で、デュナンよりも先にソルフェリーノの戦いで救護活動を行ったことでも知られる。

テオドル・モーノワール医学博士——庶民派の外科医で、その鋭く思慮深い判断力から、委員会の名助言者ともいわれた。

この5人の「ジュネーヴの紳士たち」は、ただちに行動計画を策定した。

デュナンと同じく、委員全員がすべての国で戦争が起こる以前に、訓練を受けた「ボランティア救護員」と、医療器材や担架やリント布<sup>9)</sup>などのあらゆる資材を備えた団体を創設しておくべきだと考えていた。そしていざ戦争が勃発したら、十分とはいえ

9) 包帯や湿布に用いる、起毛加工を施した綿布

ない自国軍の医療活動を支援するために、ただちにこの団体が戦場へ赴くのだ。

計画はごく単純なものだった。しかし、ただの素人としか思えない民間人が戦場に出てくることを、政府や軍が受け入れるかどうかはわからなかった。

プロイセンのヴィルヘルムⅠ世<sup>10)</sup>が、宰相ビスマルクのいる国の国王は楽じゃないとロシアの皇帝に漏らしたように、モアニエも、デュナンを書記にして自分が委員長を務めていくことは楽な航海ではないと気づいていた。デュナンが計画をどんどん先に進めるよう、いつも彼を急<sup>せ</sup>ぎたてるからである。

デュナンは、戦争に関する調査を続け、オランダの友人であるバステイニング陸軍軍医と意見を交わす中で、あることに気づいた。あつても交戦中に二分されてる地域で、負傷者の救護に軍医が飛び出していけば、敵は即



デュナンの友人で協力者だった J. H. C. バステイニング医学博士 (1817-1870)  
オランダ陸軍軍医。『ソルフェリーノの思い出』に感銘受け、オランダ語に訳出した。1863年3月にベルリンで開催された国際統計会議の際には、デュナンと共に「中立」の重要性を説いた。  
© ICRC Archives

10) プロイセン王で、後の初代ドイツ皇帝

座に彼に向けて発砲する。敵からすれば射撃を控える理由などない。軍服姿のその男が、ただ負傷兵を収容するためだけに出てきたのだと示すものが何もないからである。もしそれが歩兵隊の軍医なら歩兵の軍服を着ているだろうし、騎兵隊の軍医なら騎兵の軍服に身を包んでいるだろう。そうであれば、彼は正当な射撃目標となってしまう。射程圏内に馬車が入って来た場合も同じことだ。敵はそれを爆破しようとするに違いない。その馬車が単に負傷兵を乗せているだけだと示す方法がないからだ。また、敵陣内の建物は、その周囲に忙しく動き回る兵士たちがいれば、当然攻撃を受ける。残念ながら、それが野戦病院であることを示す術がないからだ。もし何か示すものさえあれば、そこは攻撃されないはずである。もはや戦闘能力を失った哀れな兵士たちを、なぜ殺す必要があるというのだろうか。

デュナンの偉大な功績は、そのような戦場で生じる、人命を左右し不条理極まりない状況を一変する方法を考え出した点にあった。デュナンが提案した解決策は、あまりに——天才級とも呼ぶべき——単純明快なものだったので、なぜもつと早くに思いつかなかつたのだろうかと誰もが驚いた。



必要とされたのは、すべての国の軍隊に通用する、たったひとつの特殊標章を決めることだけだった。その標章を医師や看護師が身につけ、救急搬送用の馬車に表示し、その標章旗を衛生部隊や野戦病院の上に掲げるのである。つまり、その標章とは、軍の一員ではあるものの、戦闘行為には一切参加せず、まさにその理由から、攻撃されるべきではないすべての人々を示すためのものである。そしてこの標章は、これをつけている者に、攻撃を受けないという、デュナンが「中立」と呼んだ新たな法的地位を与えるものであった。

実際、この考えは非常に斬新だったので、「5人委員会」の他の委員たちは懐疑的な姿勢を崩さなかった。しかも、この取り組み全体を自分たちの財源で賄うのは難しいとも考えた。国際法として条約を締結し、各国政府相互間の約束を取りつける必要があるのではないか。しかし、この種のことは、いまだかつて一度も行われたことがないではないか。戦争についての慣習法はこれまでも確かに存在したし、規則になった慣習もある。だが、交戦国に対して、戦場での行動の変更を強制するような正式な条約の締結など、当時は想像もつかないことだったのである。戦争とは、そもそも、

あらゆる法規を破ることはなかったのか。

とはいえ、緻密な論理と人道で自分の主張を訴えるデュナンに、誰が異を唱えたりできただろうか。

デュナンの計画はしごく簡単だった。ヨーロッパ中の元首あてに書状を書き送り、その国の代表を会議に派遣するよう依頼するのである。会議の開催日時と場所はすでに決まっており、1863年10月26日にジュネーヴにおいてとされた。委員たちの疑念をよそに、デュナンはベルリンで開催される国際統計会議に自費で赴いた。その目的は、その場で自分の考えを発表して国際社会からの支持を得ることにあった。言い換えれば、「問題提起」である。デュナンはベルリンで、友人のバステイング軍医に手伝ってもらい、自分だけの発案で書状を書き、自費で印刷したうえで、各国政府にジュネーヴ会議へ代表を送るよう求めたのである。その書状は、「5人委員会」が提案していた議定書案の最後に、デュナンが自らの「中立」の考えに関する条項を補足し、「5人委員会」<sup>11)</sup>の名を冠し、「ジュネーヴ委員会書状 J・アンリー・デュナン」の名で出された形になっていた。

11) 実際には「負傷軍人救護の国際委員会」と記されている

国際統計会議の会期中に開催されたパーティーの席で、デュナンは数多くの地位の高い人々と会い、自国の政府から代表をジュネーヴへ派遣させるという確約を取りつけた。デュナンは、プロイセン国王と皇太子、皇太子妃の3人に紹介された。全員がデュナンの本を読んでおり、彼は温かく迎えられた。ベルリンに続き、ドレスデン、ウィーン、ミュンヘンを訪ねたデュナンは、ザクセン王国のヨハン国王、オーストリアのライナー大公、バイエルン王国の陸軍大臣をはじめとする多くの人々に会い、訪ねた先々で熱烈な歓迎を受けた。ザクセン王国のヨハン国王は「この考えを是としない国家は、ヨーロッパの世論によつて排除されるであろう」と言明した。デュナンの旅は、途方もない大成功をおさめたのである。

デュナンは10月20日にジュネーヴに戻った。「5人委員会」はベルリンでデュナンが独断で行った書状の一件に関し、非常に警戒心を強めていた。モアニエはもつとも冷ややかで、デュナンの「中立」という考えはどうみても時期尚早だと思っていた。

それにもかかわらず、大方の予想を遙かに上まわる返事が殺到しはじめたのである。10月26日、ジュネーヴで「国際会議」が始まった。その反応は主催者側の期待に完

壁に応えるものであった。会議はまさに大成功で、14カ国の政府から18名の代表が出席した。それでも、高級将校や軍医、主計総監などからなる参加者たちは、目の前におかれた計画のあまりの斬新さと大胆さに、最初はやや疑心暗鬼になったほどだった。彼らはみな、軍の衛生部隊が不十分だと認めざるをえなかったし、戦争が起こった際に行動できるよう十分に訓練を受け、きちんと組織化された団体があれば、有効な救護活動ができ、また、膨大な数の人々の生命を救いうるということを確認したのだ。会議は、最終的にはとても積極的な雰囲気生まれ、そこでいくつもの決議が起草された。その主要な条項は次のようなものである。

第1条 各国は一つの「中央委員会」<sup>12)</sup>を組織し、その任務は、戦時に必要な場合、力の及ぶかぎりあらゆる方法によつて軍の衛生活動を支援するものとする。

第5条 戦時において交戦国の「中央委員会」はその力の及ぶかぎりそれぞれ軍隊に衛生活動のための救護物資を配給するものとし、特にボランティアを組

12) 後の「赤十字社」

織し活動に従事させ、軍当局と協議のうえ、負傷者を看護する場所を設けるものとする。

これらのボランティア団体は、どのように識別され、また、どのように一般市民と区別されるのだろうか。これもまた、決議を見れば明らかである。

第8条 ボランティア救護員は、すべての国において同一の識別標章として、白地に赤十字の腕章をつけるものとする。

デュナンが非常に重要視した「中立」の問題については、同会議で採択された3つの勧告のうちの2番目に、次のように記されている。

「戦争時において、交戦国は野戦病院および陸軍病院の中立を宣言し、また、その中立は、公的医療要員、ボランティア救護員、負傷者の救護にあたる当事国の住民、

および負傷者自身に関しても同様に、完全に無条件で認められなければならない。」

このすべての基盤となる赤十字規約の末尾に記された日付を忘れてはならない。1863年10月29日が、赤十字誕生の日<sup>13)</sup>となったのである。それから2カ月とたたないうちに、「負傷軍人救護の国際委員会（以下、「国際委員会」）——これが「5人委員会」が採用した名称だった——は、最初の中央委員会がヴェルテンブルク王国<sup>14)</sup>に設立されたことを知って喜んだ。その後、事は急速に進んだ。1年以内に、さらに9つの中央委員会が設立され、オルデンブルク大公国<sup>15)</sup>、ベルギー、プロイセン王国<sup>16)</sup>、デンマーク、フランス、イタリア（のミラノ）、メクレンブルク大公国<sup>17)</sup>、スペイン、そして、ハンブルク<sup>18)</sup>に中央委員会ができたのである。

モアニエにとって、ある考えを採用するということは、それを実行に移すことを意味した。再びモアニエとデュナンは、手分けをして仕事に取り組んだ。モア

13) 現在は、赤十字国際委員会（ICRC）と名称が変わった「5人委員会」による第1回目の会合が開かれた1863年2月17日をもその創設日とし、「赤十字誕生の日」としている

14) 19世紀から20世紀初頭にかけてドイツ北西部を統治した王国

15) 19世紀から20世紀初頭にかけてドイツ南部を統治した領邦国家

16) 現在のドイツ北部からポーランド西部を治めた王国。首都はベルリン

17) ドイツ北部で14世紀から続いた公国の流れをくむこの大公国は、19世紀から20世紀半ばまで存在した領邦国家

18) 中世からハンザ同盟の中心的存在であった帝国都市。この時期は自由都市としてドイツ連邦の一員であった

ニエはお互いに締結することを切望していた条約の草案作りをし、一方のデュナンは、これまでと同様に、自分が得意とする、いまなら「広報活動」とでも呼ぶべき仕事に専念した。

条約締結に向けての一般的な手続きには、外交会議がある。しかし、この会議の開催準備は一般の国民ではできない。外交会議の招集通知は、一国の政府が出す必要があるからだ。今回の場合は、スイス連邦政府が自ら進んで会議の招集を宣言し、しかもその開催地は首都ベルンではなく、赤十字誕生の地であるジュネーヴにしなければならぬ。さらに、各国政府関係者の関心を引き、この新しい外交文書に署名する資格のある全権大使をジュネーヴに派遣するよう政府関係者を説得する、という根回しの仕事はまだ残っていた。早速デュナンはこの仕事に取りかかった。ドイツ諸邦には、すでにデュナンの意見が大方受け入れられていたので、デュナンの注意はもっぱらフランスに向けられた。デュナンが、自分の考えを実に熱く語ったのが功を奏し、フランスの外務大臣ドルアン・ド・リュイスの支持を取りつけることができた。その結果、リュイス外相は、軍の衛生部隊の「中立」という問題にナポレオン三世が個人的に関

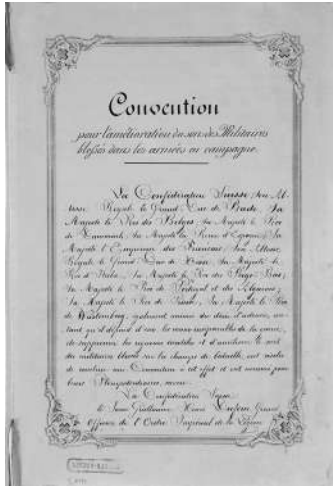
心を寄せていると駐在国の政府に伝えるよう、各国にいるフランス大使に向けて指令を出したのである。ヨーロッパの他の国々に決断をさせるには、それで十分だった。

1864年8月8日に始まった外交会議に、16カ国の政府代表が集まった。どの代表も「国際委員会」が準備したさまざまな草案を事前に読み込んできており、会議の当初から、合意に達したいという真摯な思いにあふれていることが感じられた。モアニエが起草した条約案の文言は、実に見事に書かれていたので、細部のごくわずかな変更が必要とされただけであつた。したがって、ジュネーヴの歴史ある市役所を会場にして開かれた会議に出席した全権大使の面々にとって、最終文言を決定するには2、3日あれば十分だった。ここには、次のような条文が含まれていた――

第1条 野戦病院および陸軍病院は局外中立とみなすものとする。そこに傷病者が收容されている間は、戦闘員はこれを保護し、侵害してはならない。

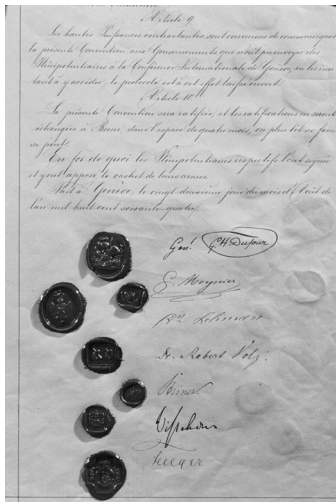
第2条 野戦病院で活動する監督員、医員、事務員、担架兵、宗教要員を含む要員



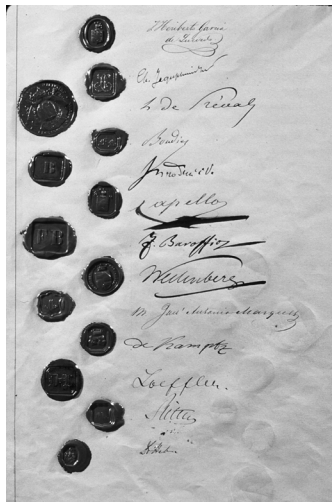


第1頁

第7頁



第8頁



1864年8月22日に締結されたジュネーヴ条約

署名は条約書の第7、8頁で、最初にデュフェール将軍、続いてモアニエの署名が見える。最終頁は以後も続けて署名が行える体裁になっている。外交会議はジュネーヴ市庁舎に現在も残る会議室(後に「アラバマ・ルーム」と呼ばれる)で行われた。

は、その職務に従事し、負傷者を収容し看護に従事する間は、同様に中立の資格を享受すべきものとする。

第7条 明瞭に識別できるよう、陸軍病院、野戦病院、および、傷病者を後送する移送班には、各国共通の旗を表示するものとする。その際、いかなる場合にも国旗を併用するものとする。

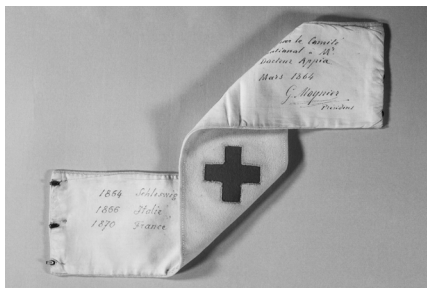
中立の資格のある者は、腕章を着用するものとする。ただし、その交付は軍当局の決定によるものとする。

旗および腕章は、白地に赤十字とする。

ここでも、再び赤十字標章についての言及がある。しかしながら、1年前には、標章が「国際委員会」のメンバーであるボランティア救護員のみを明示することを目的としていたのに対して、この時点では、その標章の意味合いが大きく変わっていた。それは、標章をつけている人に加えて、標章を掲げた車両や建物に、ある種の特別な

地位を与えた点である。この標章は、西欧列強が締結した「戦地にある軍隊の傷者救護のための1864年8月22日のジュネーヴ条約」<sup>19)</sup>と命名されたこの正式な条約によって、それらの人と物を保護したのである。

この日付もまた記憶にとどめておく必要がある。この10カ条から成る短い条約の誕生は、人類史上における画期的な金字塔である。これにより、すべての人道法および戦争法規に関する条約全般への道が拓かれた。ここから、ハーグ条約と、さらに直接



#### デンマーク戦争時、アピア博士が身につけた赤十字腕章

デンマーク戦争とは、1864年夏、シュレースヴィヒ公国とホルシュタイン公国を巡って勃発した、デンマーク軍とプロイセン・オーストリア連合軍との戦争（別名「第2次シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争」）。腕章裏には「国際委員会」を代表してモアニエの署名があり、ルイ・アピア博士がつけたこの腕章が、赤十字標章が戦場で使われた最初の事例である。

© ICRC Archives

19) 別名「赤十字条約」とも呼ばれる

的には、後に4つの条約に発展する、現在のジュネーヴ諸条約が生まれたのだ。

これ以降——デュナン自身が捕虜の問題についての報告者となった1867年のパリ会議<sup>20)</sup>を除き——デュナンが公式に国際会議に参加することはなかった。しかし、彼は自分の考えの普及と、外交会議や国際協定によつて、戦争の捕虜や海洋での負傷軍人と難船者、および、ある種の民間人を保護しようと、あらゆる障害に立ち向かい孤軍奮闘したのである。デュナンなしで、そのような目的すべてが達成されるには、まだ何年もの歳月が流れることになる。

一方、すでにそのころには、「国際委員会」の内部に不協和音が生じていた。デュナンが答える気にもなれないさまざまな批判が彼自身に向けられ、モアニエのデュナンに対する態度にも不信感が見てとれた。外交会議の開催を控えた1864年5月25日には、いろいろな非難に嫌気がさしたデュナンが、モアニエに手紙を書いている。

「さて、我々の仕事の前進と発展に向けて私が貢献できそうなことは、すべてやってきたと存じます。私はきつぱりと身を引きたいのです。この仕事に積極的にか

かわることはやめますから、もう私を当てにしないでいただきたい。私は舞台裏に引つ込むつもりでおります。事業はすでに緒に就きました。私は神の御手にある道具のひとつに過ぎなかつたのです。この事業を推し進めていくには、私よりもっと適任の方々がいるはずです。」

モアニエはデュナンの辞意に異を唱えた。その結果、デュナンはその慰留を受け入れ、1867年まで「国際委員会」の書記職にとどまつたのである。

## 6. 栄光の日々

1866年6月、プロイセンとオーストリアとの間で「7週間戦争」<sup>21)</sup>が勃発した。赤十字に関して、旧態依然のオーストリア帝国の対応は遅れていた。当時、ウィーンには「国際委員会」がまだ存在せず、同国政府はジュネーヴ条約に加入していなかった。他方、プロイセンの状況はかなり異なっていた。すでに多くの赤十字社がきちんと設立されており、誰もがジュネーヴ条約をよく理解していた。この差異はすぐにとても顕著な形で露呈した。オーストリアの衛生部隊は極めてお粗末な状況だったのに対し、プロイセンは、優れた装備を整え、見事に訓練された医療救護班が軍医と衛生兵を支援していた。プロイセン政府は、敵側になんら互恵的見返りを求めることなく、ジュネーヴ条約を厳正に適用した。その結果は、戦死者数に歴然と現れた。死者の数があまりに多かつたオーストリアは、「7週間戦争」の終結を待たずにジュネーヴ条約に加入した。

勝利したプロイセン軍がボヘミアから凱旋すると、ベルリンは歓呼して迎えた。首

21) 普墺戦争。1866年、ドイツ統一をめぐるプロイセンとオーストリアとの間で行われた戦争。シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン問題が発端で、プロイセンが優勝した

都全体が歓喜に酔いしれていた。軍隊は凱旋門をくぐり旗で飾られた街路を行進した。そのとき、きらびやかな軍服に身を包んだ人々に交じって貴賓席にいる黒いフロックコート姿の男性が人目を引いた。その人物こそ、アウグスタ女王<sup>22)</sup>に招かれたアンリー・デュナンであった。女王は、自ら負傷兵を看護し、赤十字標章のもとにある団体の利点を高く評価していた。

その夜、デュナンはプロイセン王室に招かれた。ヴィルヘルムⅠ世はデュナンに、ジュネーヴ条約に対する自らの称賛の思いと重要性を明言した。



赤十字腕章をつけたアウグスタ女王（1811—1890）

デュナンの考えに感銘を受けたアウグスタ女王は、プロイセンで「愛国婦人会」を組織して平時からボランティア看護師の養成を行い、赤十字活動を精力的に推進した。

© ICRC Archives

22) プロイセン王で、後の初代ドイツ皇帝ヴィルヘルムⅠ世の妃

さらに数日後、デュナンは再び宮殿に招かれた。アウグスタ女王は、デュナンの名譽を称えるために赤十字の腕章をつけており、晚餐後にはデュナンとゆつくりと懇談した。女王は『ソルフェリーノの思い出』を読んだときの感動を話し、自分はデュナンの信奉者であり、そのことが理由で、コレラの危険をもかえりみず、負傷兵の看護に向くことを自らの使命と考えるようになったと述べた。デュナンは望外の喜びで胸がいつぱいになった。まさに、これまでの功勞が報われた瞬間であり、彼の仕事にこれ以上の誉め言葉が他にあつたであろうか。それは、デュナンにとつて、人生の絶頂を実感させるできごとだった。しかし、彼の荊いばらの日々もすぐそこまで迫っていたのである。



## 7. カルヴァンの街との決別

問題の中には、放っておいても自然に解決するものがあるが、不幸にも、「モンズ・ジェミラ製粉」が抱えていた問題はそうはいかなかった。社長であるデュナンが負傷兵の命を救うために費やしていた4年間は、その会社の状況を改善するには少しも役に立たなかった。何もかもが崩れかけていて、ほんのわずかなもうひと揺れで、事業全体が破綻する状況になっていた。

1867年、デュナンもその理事会に名を連ねていたジュネーヴ信託銀行が倒産した。商事裁判所は理事会に厳しい判決を下したが、デュナンの名は含まれていなかった。しかし、その1年後の民事裁判所での訴訟では、理事会のメンバー全員が有罪判決を受け、さらにデュナンだけが仲間を「故意にだました」という詐欺罪さぎにも問われた。

デュナンはその一撃ですっかり打ちのめされてしまい、破産宣告を受け、百万フラン近い負債を負うことにもなったのだった。この知らせをパリで受け取ったデュナンは、その後、自分の故郷ジュネーヴを二度と目にすることはなかった。

後年、デュナンは、ときには歩道のベンチや駅の待合室で夜を明かすまでに落ちぶれたと、悲惨だった自分について明かしている。パン屋の前を通りがかったときには、腹が鳴ってどうしようもなかったし、靴下は穴だらけだったので、それを隠すのにかかとに墨を塗ったこともあった。

そんな状況にもかかわらず、1867年7月7日に彼は、ウジェニー皇后<sup>23)</sup>からパリのテユイルリー宮殿へ来るよう招かれた。皇后は、ジュネーヴ条約を海軍の兵士にも拡げるために草案を準備するようデュナンに依頼し、一方のデュナンは、捕虜の窮状に配慮が必要だと訴えたのだった。

「国際委員会」ではデュナンへの疑念が膨らんでいた。すでに1867年の夏、第一審の判決が下される以前から、モアニエはデュナンを委員会から排除しようと画策していた。

1867年8月25日、ちょうどパリ



ナポレオン三世の妃、ウジェニー皇后（1826—1920）  
1860年ごろ。

© via Wikimedia Commons

23) フランス皇帝ナポレオン三世の妃

の「万国博覧会」のときに赤十字社の会議に出席したデュナンは、母親に手紙を書き送っている。

「私はモアニエ氏と面識があるような素ぶりは見せませんでしたし、彼も私のほうへ近寄ろうとはしませんでした。私たちはお互いに、目も合わせなければ、口をきこうともしなかったのです。」

しかし、赤十字の会議では、その最初の会合で、デュナンはオーストリア、オランダ、スウェーデン、プロイセンそしてスペインの各国「中央委員会」から名誉会員に推薦され、さらに彼は、ギユスターフ・モアニエ、デュフール将軍と共に「万国博覧会金賞」を受賞している。

これに先立ち、8月25日にデュナンは「国際委員会」宛てにも書簡を送っており、9月8日にギユスターフ・モアニエはそれを他の委員に向けて読みあげている。その書簡の中でデュナンは、委員会の書記を辞任すると表明したのだった。会合の議事録

には、このように記されている。

「当委員会の書記職のみでなく、委員会の委員の職も辞することを承認した旨、返答を送ることとする。」

19世紀末の当時は、倒産に伴う信用失墜とはこのようなものであり、これがカルヴァンの<sup>24)</sup>の街ジュネーヴで、破産宣告を受けた人間が支払わねばならない代償であった。

---

24) ジャン・カルヴァン〈1509年—1564年〉はキリスト教宗教改革の指導者のひとりで、ジュネーヴはカルヴァン主義が実践された地として知られる。カルヴァン主義では、何も持たない者や役に立たない者を神はちいさく零落させるとされた

## 8. 忘却の淵から

1870年、プロイセンとフランスとの間で戦争<sup>25)</sup>が始まったとき、デュナンの経済状況は少しもよくなつてはいなかった。彼はどのような超人的努力で、人々の忘却の淵から這いあがったのだろうか？ それは誰にもわからないが、とにかくデュナンは、さらに多くの負傷者を救うために、再びこの世の表舞台に登場したのだった。

1867年7月7日に、パリでウジェニー皇后からテュイルリー宮殿に招かれたとき、デュナンは皇后とかなり長時間にわたって話をする機会があつたことを思い出してほしい。そのときに皇后は「負傷した水兵や難破船の兵士、すべての国の救援船やその乗組員たちが、ジュネーヴ条約が宣言する中立の恩恵を享受できるようにしたい」という熱い思いをデュナンに語った。

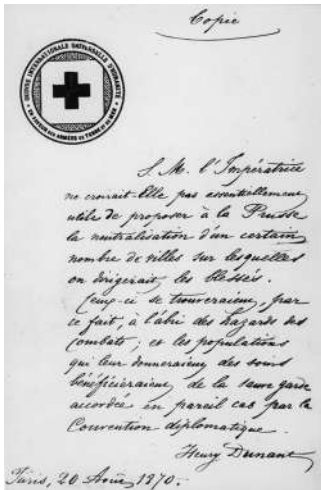
1870年8月20日、デュナンはジュネーヴ条約をさらに一歩進めるための新たな計画について知らせる書簡をウジェニー皇后に送っている。

25) 普仏戦争。1870年～71年、プロイセンを中心とするドイツ諸邦とフランスとの間で行われた戦争。この結果、プロイセンが大勝してドイツ統一を果たし、フランスはナポレオン三世が退位に追い込まれた

「皇后陛下におかれましては、負傷者の搬送先となる街を中立とするよう、プロイセンに提案することに、計り知れぬ意義があるとはお考えになられませんか。そうすることによって、負傷者は戦闘による危険から保護されるであります。」

この提案が実を結ぶことはなかった。しかし、その根本にある理念の種は蒔かれ、後に、交戦国は負傷者や難民を保護するこの種の安全地帯を設置することができるようになったのである。

デュナンが精力的に活動に力を注いだので、ジュネーヴ条約のことを一度は完全に忘れてしまったかに見えたフランス政府も、条約文を公式に刊行することを決めた。デュナンは、特に、負傷者を救護するための努力を次々に



ウジェニー皇后に宛てた、1870年8月20日付のデュナンの手紙

© ICRC Archives

重ねていった。彼は、「フランス国際委員会」が戦地に派遣する救護隊に自らも参加した。12年前のカステイリオオーネのときと同様に、デュナンはパリへ搬送されて戻ってきた負傷者たちを慰問した。さらに死者の身元を確認できるように認識票のシステムを導入し、また、彼の言葉を借りれば「無法者の武装農民として狙撃されないように、軍服ではないがチュニック<sup>26)</sup>を着ている」不正規軍兵士や遊撃志願兵に対して、交戦国兵士の地位を与える問題についても忙しく動き回った。デュナンはすでにゲリラ軍の保護の容認に向けても奮闘していたのである。

1871年のパリ・コミューンのときは、デュナンは単に同情を示すだけでなく、とても勇猛果敢に行動した。並々ならぬ勇氣をもつて、パリの革命政府側から多くの犠牲者を救い出し、また、ヴェルサイユの臨時国防政府が過激な攻撃を仕掛けるのではないかと恐れたデュナンは、それを阻止せんと、臨時政府の代表だったアドルフ・ティールに嘆願するために命を賭して戦線を行き来した。

それにもかかわらず、デュナンには疑いの目が向けられた。この男はいったい何者なのか？ ドイツのために働くスパイか？ はたまたヨーロッパ諸国の政府が逮捕し

26) 詰襟で腰丈の上着

て投獄し、処刑しようと血眼になつて捜している「インターナショナル」の一員なのか？ 「国際労働者協会（インターナショナル・ワーキング・メンズ・アソシエーション）」と、赤十字の仕事を示す「インターナショナル」という言葉で、ちよつとした混乱が生じていたのである。だが、警察にそのような微妙な区別を期待するのは、土台無理な話であつた。



## 9. 見果てぬ夢の先へ——理想と現実の狭間で

かくして平穩が戻ってきたものの、デュナンは自らが目撃したいろいろな利己主義や卑劣な行為に嫌気がさし、再び極貧生活の日々へと身を沈めた。まるでドン・キホーテのように。とはいっても、ロバのロシナンテと忠実な従士サンチョ・パンサはいなかったが、さらなる広い視野を捜し求めたのだった。頭の中は、いくつもの壮大な計画でいっぱいだった。もし紛争が、国際法に基づいた「国際仲裁裁判所」の法廷で、国際的権威によつて解決されるとしたら、この世の中がどうなるのかが彼にはわかつていた。そのためには、世論を醸成し、思想の幅を拡げ、理念を平和の構築へと向けなければならなかったのだ。

1866年に着手していた「国際図書館」の計画について、デュナンは、それを再開することが不可能だとわかった。1869年にパリで最初の刊行物が発行されたとともに、普墺戦争ふおつが勃発したからである。手元に残ったのは、もう二度と換金できなくなった10万フランの債権だけだった。

「私が費やした時間と労力はすべてむだになってしまった。しかし、考えはよかつたのだが……」

実際に、「ユネスコ」<sup>27)</sup>への萌芽がそこにあつたのである。

その一方で、デュナンは、少なくとも1866年以来温めてきた他の2つの大きな計画を提唱して歩いた。すなわち、「ユダヤ人のパレスチナへの再入植」と「捕虜の保護」についての計画である。デュナンのパレスチナ構想については、その計画の実現性と先見的な思考力という点で、時代の遙か先をいつていたので、当時は誰からも理解をえられなかった。唯一、1897年にスイスのバーゼルで開かれた第1回シオニスト会議で、国際シオニズム運動の主導者の一人であつたテオドール・ヘルツルが、デュナンを先駆者だと絶賛したに過ぎなかった。

現在、アンリー・デュナンの名を冠した木立が、エルサレムの傾斜地に広がる人類の恩人たちに捧げられた森の中に茂っている。だが、デュナンのアイデアの多くは、いまだに実現していない。それらのアイデアは、疑いもなく中東問題の平和的解決の

基盤となりうるものである。

捕虜の保護に関しては、デュナンは最初の外交会議<sup>28)</sup>の前の1863年には、すでにこの問題について考えていた。1867年、パリ会議に向けて、彼はこの問題に関する報告書を起草している。しかしながら、その労力には関係者から何ら反応が得られなかったのである。後に、彼は再びこの難問に取り組み、パリで特別委員会を立ち上げた。1872年6月、パリから親族に宛てた手紙の中で、彼はこう記している。

「ああ！ もし彼らが、私の経験した困難と苦悩、苦痛と悲哀、そして、どうしようもないほどの貧窮をわかってさえくれたなら……いま私は、捕虜の窮状に関する条約を、すべての文明国に受け入れてもらうために設けられた国際常置委員会の委員長を務めているのです。」

フランスでは自分の主張に耳を傾けるまでの機が熟していないと悟ったデュナンは、イギリスへと向かった。ロンドンで行われた会合で、デュナンはあまりの空腹から卒

28) 第1回ジュネーブ会議

倒してしまい、演説を終えることができなかった。しかし、その数日後にはイギリス南西部のプリマスで講演を行い、「国際仲裁裁判所」の計画を披露した。こうして、さらに多くの種子が地に蒔かれたのだ……。

デュナンにとつてそれは、固い決意を胸に秘めながらも、度重なる苦勞と身を切られるような困窮にあえぐ2年間の始まりだった。彼がめざした目標は、捕虜の取り扱ひに関する条項を定めるための、新たな外交會議を招集することにあつた。

1873年12月31日、デュナンは親族に宛てた手紙で、こう書いている。

「これまで、あまりに多くの試練を受けてきましたが、けつして無駄ではありませんでした。経験した試練によつて私たちは清められ、天国への道が開かれるからです。ですが、その試練は、ほんとうに耐えがたいものです。我慢しなければならぬ身体の苦痛や、明日どうなるかもわからない恐れというよりも、あなた方のことを思うときの精神的な苦悶と、私のせいであなた方にかけている心配や迷惑や気苦勞を思うと

きの苦痛が耐えがたいのです。口には出しませんが、ときには、こんな絶望にはもうこれ以上我慢できないと思うときもあります……」

そんな折、ロシア皇帝アレクサンドルⅡ世が、デュナンを支援すると約束した。そして、1874年8月にロシアが主催国となり、ベルギーのブリュッセルで外交会議を開くという提案を行って、主要国に会議への参集を促したのであった。デュナンは、この外交会議で討議の範囲を拡大し、「戦時下の国際関係における全般的解決」に関する条項を規定したいと望んでいた。ところが、ロシア皇帝やその閣僚たちの見解は、デュナンのそれとは一致していなかったのである。

「イギリスの敵意のせいで、この件に関する欧州列強との間の外交上の理解は妨げられるだろう」とデュナンは記している。

デュナンが追い求めた捕虜条約<sup>29)</sup>が、1929年に最終的に調印されるまでには、

29) 「1929年の捕虜の待遇に関するジュネーブ条約」

まだ長い年月を要した。それまでの間、第一次世界大戦中には非常に多くの捕虜が収容所に投獄されることになるのである。

ブリュッセルでの外交会議における討議は、戦争法規の制定へと傾いていた。その結果を、デユナンはこう記している。

「会議は今週中にけりがつくだろう。私は終始ロシアと戦ってきた。なぜなら、ロシアが戦争法規の制定を望んでいるからだ。彼らは、戦争は人類にとつて通常の状態であり、これからはずつとそうだという考えを人々に受け入れさせようとする。私と捕虜のための委員会（と負傷軍人のための委員会）が、戦争の避けがたい恐怖を軽減したいと切に願っているにもかかわらずだ。戦争とは、次世代の人々からすれば、恐らく狂気でしかない、恐ろしい惨劇なのだ。」

デユナンの直感是非常に鋭く、けつして誤った方向に進むことはなかった。事実、国際仲裁裁判所が設立され、捕虜条約が調印され、ユダヤ人がパレスチナに帰り、世

界文学の不朽の名作があらゆる言語に翻訳されることになるのだから。だが、その始まりには、なんと過酷な戦いが待ち受けているのだろうか！

## 10. 永遠のデュナン

もうひとつの日付を明記しておかねばならない。それ以降、デュナンの公人としての生涯が終わったと考えられる日付だ。1875年2月1日、「黒人の売買と奴隷貿易の全廃」をめざす国際会議がロンドンで開催された。この外交会議は、デュナンが1870年の普仏戦争ふふつの直後にまずパリで創設し、後にロンドンで創設した「秩序と文明に関する世界同盟」によつて招集された。彼が愛してやまない人類の中の、もっとも哀れな人々のために働きながら、人類の苦痛に注意を払おうと、デュナンは人々の良心に向けて自らの最後の訴えを叫び続けたのだつた。

それから、極貧生活に転落した放浪の10年間が始まつた。デュナンは、浮浪者よろしく施しを受けながら、ときには、ほんのひと握りの友人たちの好意に支えられ、アルザスやドイツ、イタリアを歩き回つた。その中に、フランスの作曲家ジャン・ジョルジュ・カストネルの未亡人レオニ・カストネルもいた。デュナンは公の場から引退したにもかかわらず、引き続き誹謗中傷にさらされていたのだが、カストネル夫人は、



1888年に自分が亡くなるまで、そんな彼に支援を惜しまなかった。デュナンはずっと妬みと悪意につきまとわれていたのだ。

デュナンの生涯におけるこの時期の知的活動の詳細が、さまざまな研究によって明らかになるまでには、まだ相当の時間を要するであろう。いま私たちにできるのは、その生涯の終わりに臨んで、豊かに実を結んだデュナンの思想から紡がれた、ハイデンでの彼の知的活動の成果に思いをはせることぐらいである。豊かに実を結んだ思想とは、その時代の闘争や希望や栄枯盛衰を超越した天才こそが持つ思想であり、20世紀の大きな対立の中から、人間が人類として一体となり、連帯することの重要性に目覚め、ついには世界に平和をもたらし、人類の存続を確実にするための、唯一の可能な解決方法を世界に対して提案するものである。

デュナンの存在とは、なんと変わったものであったのだろうか！ 最初の34年間の人生は、なんら目立つこともなく、自身の内面の準備と研究と思索と活動の日々であった。それに続く5年間は、『ソルフエリーノの思い出』の出版からジュネーヴ信託銀行の倒産に至るまでの名声と成功の日々。次の28年間は貧困と放浪と隠遁生活の日々。

そして最後の15年間は、著名人としての日々であり、亡くなるその日まで、デュナンはハイデンの病室を離れることはなかった。

1910年10月30日、アンリー・デュナンはこの世を去った。彼の死を終焉しゆうえんと呼ぶのは正確ではないだろう。彼の魂は、むしろ、世界中でもっと活躍するために解き放たれたのではないだろうか。いまでも彼は、人々の胸の内に使命感を呼び覚まし、よき模範となり、苦しむ人々を救い続けている。デュナンの活動は、いまなお繰り返し返されているのである。その人がどこ出身であるかや、誰に仕えているかに関係なく、男性であれ女性であれ、ただ苦しんでいるというだけの理由で、人間が、苦しんでいる人間を救うあらゆる場面において、日々その活動は連綿と続いていくのだ。



アンリー・デュナンの墓碑 (スイス、チューリッヒ; ジールフェルト墓地)

© Hata/I.H.S.



デュナンの墓碑（前頁写真）は、1931年、デュナン生誕100周年を記念して、スイス、チューリッヒのジールフェルト墓地に建立された。デュナンの没後、遺言にしたがって遺体はハイデンからチューリッヒに移され、このジールフェルト墓地で荼毘に付された。しかし、遺骨は同墓地の納骨棚に収められたまま、墓は作られなかったのである。

没後およそ20年が経過し、チューリッヒのサマリタン協会が発起人となってスイス全国規模での募金活動により寄付が集められ、この墓碑が建立された。除幕式は1931年5月9日に行われ、遺骨はその前日、デュナンの誕生日である5月8日に納骨棚からこの墓碑の下に埋葬された。

墓碑には、ドイツ語で次のように記されている：

J. アンリー・デュナン

1828年5月8日ジュネーヴに生まれ、

1910年10月30日ハイデンで没す。

ジュネーヴ条約と赤十字の創始者、

崇高なる精神を持った『ソルフェリーノの思い出』の著者、

第1回ノーベル平和賞受賞者

これを讃える国民の寄付により建立。

1931年

墓碑の彫像は、新約聖書のルカによる福音書10章にある、いわゆる「よきサマリア人」の逸話を題材にしている。エルサレムからエリコの街に下る途中で、盗賊に襲われたユダヤ人の旅人が瀕死の重傷を負って道に倒れていた。そこを通りがかったユダヤ人の祭司も、次に通りがかったレビ人も、見て見ぬふりをして何もせずに通り過ぎたのだが、最後に通りがかったサマリア人だけが、その旅人に同情し、隣人として彼を介抱したという逸話である。



## 訳者あとがき

赤十字の創始者であり、ジュネーヴ条約を発想し推進したアンリー・デュナンの功績や全体像について詳述した日本語の一般書は、実は意外に少ない。特にその伝記については、これまでに何点か出版されてはいるものの、子ども向けの偉人伝等を除くと、現在、手軽に入手できるものはほぼ皆無に等しいのが実情である。

本書は、ピエール・ボワシエ著『Henry Dunant』の全訳である。著者のボワシエは、執筆当時「アンリー・デュナン研究所」の所長であり、赤十字国際委員会（ICRC）の理事も務めていた。しかし、1974年4月26日、その完成を見ぬまま不慮の事故で急逝した。英文原著の初出は、1974年8月発行の『International Review of the Red Cross, Vol. 14, No.161』であり、その後、同年に「アンリー・デュナン研究所」から抜き刷りが冊子として発行された。現在、ICRCの次のURLからその冊子のPDF版を入手することができる。

<https://www.icrc.org/eng/resources/documents/publication/p2028.htm>

原著の日本語訳は、過去に一度、日本赤十字看護大学助教授であった太田成美氏によつて訳出され、1988年に『赤十字の創始者 アンリー・デュナン』の書名で蒼生書房から刊行された。しかし、それから30年が過ぎ、残念なことに現在は絶版でまったく入手できない。今回新しく訳出した本書がこのような状況を少しでも改善し、アンリー・デュナンと赤十字の理解の一助となれば幸いである。

訳出にあたっては、日本の読者になじみが薄いと思われる人名や地名、史実や文化背景などに関して訳注を付し、その他にも、原著にはない情報を加筆して訳出した部分がある。また、原著の発表後に判明した事実関係を反映し、修正や変更を加えた箇所があることをおことわりしておく。さらに、引用された条約の文言等については、正式な日本語訳ではなく、内容のわかりやすさを優先して訳出した。同様に、読みやすく理解しやすいようにしたいという一念から、各章に原著にはなかった章タイトルを付し、章立ても一部変更し、原著にはまったく入っていない写真や絵画の画像等を収録する工夫をした。

末筆ながら、本書の刊行に際して著作権許諾の労をとってください、また、内容に

ついてもご助言をいただいた、赤十字国際委員会駐日事務所の広報統括官である眞壁仁美氏と、私にこのような訳出の機会を与えて監修して下さった日本赤十字国際人道研究センター所長の井上忠男氏、そして、多忙な時間をさいて拙訳草稿に目を通し、さまざまな観点から助言や指摘をして下さった日本赤十字国際人道研究センター研究員諸氏と関係者の皆さまに、この場をお借りして改めて心から感謝を申しあげる。

2018年10月30日 デュナン没後一〇八年目の命日に

廣渡太郎

❖ 参考文献 ❖

本書の訳出にあたり、主に以下の文献を参考にした。

-----  
Boissier, P. (1985). *History of the International Committee of the Red Cross, Volume I: From Solferino to Tsushima*. Henry Dunant Institute.

ボワシエ, P., 太田成美訳 (1988). 「赤十字の創始者 アンリー・デュナン」, 蒼生書房.

Bors, L. (2010). *Who is Henry Dunant?: Two Children Discover the Story of Henry Dunant and the Red Cross*. Zeit-Fragen.

Clapham, A & Gaeta, P, ed, (2015), *The Oxford Handbook of International Law in Armed Conflict*. Oxford University Press.

De Pourtalès, Y., & Durand, R.-H. (1975). “Henry Dunant, Promoter of the 1874 Brussels Conference, Pioneer of Diplomatic Protection for Prisoners of War.” *International Review of the Red Cross*, 15(167), 61-85.

Dunant, H., English version, American Red Cross (1939, 1959). *A Memory of Solferino*. International Committee of the Red Cross.

Dunant, H., English version, British Red Cross (1947). *A Memory of Solferino: Un Souvenir de Solferino*. Cassell and Company.

デュナン, H., 寺家村博訳 (1983). 「ソルフェリーノの記念」, メヂカルフレンド社.

デュナン, H., 木内利三郎訳 (2011). 「ソルフェリーノの思い出」新装版, 日赤サービス.

江間章子 (2004). 「アンリ・デュナン この人を見よ (5)」, 童話屋.



エンツェンスベルガー, H. M., 小山千早訳 (2003). 「武器を持たない戦士たち 国際赤十字」, 新評論.

吹浦忠正 (1991). 「赤十字とアンリ・デュナン 戦争とヒューマニティの相剋」, 中央公論社.

Gagnebin B, & Gazay M. (1963). *Encounter with Henry Dunant*  
Librairie de l'Université Georg et Cie.

橋本祐子 (1978). 「私のアンリー・デュナン伝——赤十字の創立者に学ぶ」,  
学習研究社.

Hashimoto, S. (1978). *Henry Dunant and Myself*. Henry Dunant Study  
Center.

Hutchinson, J. F. (1996). *Champions of Charity: War and the Rise of the  
Red Cross*. Westview Press.

ICRC (1974). “In Geneva: Death of Mr. Pierre Boissier, member of the  
ICRC”, *International Review of the Red Cross*, 14 (158), 262-263.

井上忠男 (2015). 「戦争と国際人道法 その歴史と赤十字のあゆみ」, 東信堂.

岸井敏 (2001). 「赤十字巡礼」, 日赤会館.

コッハー, E. & アマン, H., 九頭見和夫訳 (2005). 「赤十字の父 アンリー・  
デュナン」, 春風社.

Moorehead, C. (1998). *Dunant's Dream: War, Switzerland and the  
History of the Red Cross*. Carroll and Graf.

ピクテ, J., 井上忠男訳 (2010). 「解説 赤十字の基本原則〔第2版〕 人道  
機関の理念と行動規範」, 東信堂.

森田安一 (2010). 「図説 宗教改革」, 河出書房新社.

## 「アンリー・デュナン研究所」について

本書の著者ボワシエが初代所長を務めた「アンリー・デュナン研究所 (Henry Dunant Institute)」は、ボワシエ自身の発案により、1965年、デュナンと赤十字に関する研究・調査、および、赤十字運動の普及・教育活動を主な目的として、ICRC、赤十字社連盟（現在の「国際赤十字・赤新月社連盟 (IFRC)」）、スイス赤十字社の三者が合同でジュネーヴに設立した教育研究機関である。設立以来30余年わたり、人道教育や研究活動、国際人道法の発展等においてさまざまな業績を残してきたが、1999年に「人道対話のためのアンリー・デュナン・センター (Henry Dunant Centre for Humanitarian Dialogue)」(別名「人道対話センター；Centre for Humanitarian Dialogue)」と改称され、NGOとして、赤十字以外の人道機関や研究者も含めた人々による運営へと方針転換がなされた。ここでは赤十字に限定せず、多様化し複雑化する人道問題に対応するため、人道、公平、独立の原則に基づき、対話と調停で武力紛争の抑止や解決に取り組むことを任務とするスイスの私的外交機関の位置づけへと変貌を遂げている。

**【著者】 ピエール・ボワシエ (Pierre Boissier)**

1920年、ジュネーヴ生まれ。ジュネーヴ大学で法学を修めた後、1946年からICRCに参加し、1972年までの間に、フランス、キプロス、イスラエル、ヨルダン、レバノン、インドの各地で、捕虜の保護や難民問題を中心にさまざまな任務を精力的に遂行した。



© ICRC Archives (ARR)

一方、1966年からアンリー・デュナン研究所所長を兼務し、ICRCの歴史書編纂をはじめ、デュナンや赤十字の研究・教育活動に深く携わる。さらに、1973年にはICRCの理事に選出されたが、1974年、兵役訓練での不慮の事故により54歳の若さで逝去。

主な著書に、*Histoire du Comité International de la Croix-Rouge: De Solférino à Tsushima* などがある。

**【訳者】 廣渡太郎 (Taro Hirowatari)**

日本赤十字秋田看護大学看護学部教授。日本赤十字国際人道研究センター研究員。



1959年、東京生まれ。アリゾナ州立大学大学院で英語教育学と言語人類学を学ぶ。帰国後、講談社インターナショナルで編集者として語学教材や日本文学の英訳出版を手がけたのち、立教大学、日本大学芸術学部で教壇に立ち、その傍ら、NHKのテレビ番組『英語でしゃべらナイト』で「バックン英検」の企画・監修を担当するなど、英語教育に力を注いできた。現在は、看護学生への英語教育と赤十字思想の普及活動に取り組む。

主な著書に、『バックン辞書』、『間違いだらけのカタカナ英語』、(以上、GAKKEN)、『時事英語を読んで「話す力」をつける本』(中経出版)、『ビジネスに役立つ英語の音読』(ジャパントイムズ)など。翻訳書に、バンクシー著『Wall and Piece』(パルコ)などがある。



アンリー・デュナンの胸像（スイス、ジュネーヴ）  
ジュネーヴの都心、ヌーヴ広場近くに1980年に設置。台座に「赤十字の創始者」の言葉が刻まれたのは、ジュネーヴではこれが最初である。

© Hirowatari /I.H.S.

日本赤十字国際人道研究センターについて

(Japanese Red Cross Institute for Humanitarian Studies)

当センターは、赤十字と人道問題等に関する調査・研究を目的に 2011 年 4 月に学校法人日本赤十字学園の研究機関として設立されました。

センター事業は、日本赤十字社職員並びに日本赤十字学園管下の 6 大学、1 短期大学の教職員で構成される研究員のほか、その他の大学の研究者等で構成される客員研究員により実施されています。当センターの研究・調査活動にご関心のある方は、当センター発行の『人道研究ジャーナル』をご覧ください。

赤十字の創始者 アンリー・デュナン伝 赤十字はこうして生まれた

著者：ピエール・ボワシエ / 廣渡太郎訳

2018 年 12 月 1 日 第 1 刷発行

2024 年 2 月 1 日 第 2 刷発行

発行：学校法人日本赤十字学園 日本赤十字国際人道研究センター

<http://www.jrc.ac.jp/ihs/>

表紙イラスト：ササハラ ナツミ

デザイン・印刷：(株) McKenzie Media Japan

*The biography of Henry Dunant*



Japanese  
Red Cross Society